浮世絵版画の人体美学的研究 (1)

哥麿筆・版画「婦人泊り客之図」：「髪結い」の腰部のdéformationについて。

小　野　一　郎

指導教授　東京芸大美術学部教授　西田正秋　　昭和38年4月5日

I 抄 録

(1) 抄 録

哥麿筆・版画「婦人泊り客之図」3枚続きの浮世絵のうち、中央の図の女性坐像と、それと似たposeをしている「髪結い」との腰部に着目、2人のformeが重なつている場合の後部（女性）のdeformationについて研究したものである。そして本themaの場合は後部女性の腰部が前部女性によつてcutされたために、普通の場合よりも延びて表現されている点について考察を行つたものである。

II 序 説

(1) 緒 言

ギリシヤ以来、客観的写実に立脚して、それを伝統として近代に及んだ西洋絵画に比して、日本絵画（本稿では明治以前の日本画を主体として考える。）は応挙のように写生を主張した作家もあるが、所謂主観性の強い表現が一特色ともいえるであろう。なよなよとした柳腰の女性を美人の典型とした浮世絵版画は、それ自体déformationによつて成立しているとも考えられるが、哥麿筆・版画「婦人泊り客之図」3枚続きのうち中央の図の立像に重なつている後の女性坐像の腰部のdéformationを取り上げ、2つのformeが重なつた場合のdéformationの問題、（或は西田正秋教授の所謂"Apparent proportion"(1)の問題といえるかとも思うが）として考察してみたいと思い、本themaを企図したのである。

なお、人体美学とは西田正秋教授が美術解剖学を基礎として創始された独自の学術で、まだ一般に普遍性のない学術であるから、その指導原理や理論・研究法等についても解説しておく必要があるかも知れないが、それらは同教授著「美術解剖学論攷」に論述されているから本稿には省略するとこにする。

(2) 哥麿年譜と作品傾向略解

① 年 譜

喜多川哥麿（1753～1806）（哥＝歌の本字、哥麿自身はその署名に概ね本字の方の哥を使用しているから、本稿にもこれを使用することにした。但し彼も時に歌を使用していることもある。）

1753年　（宝暦3年）　哥麿生れる。出生地は川越説江戸説、京都説などあつて一定しない。

1775年　（安永4年）　22才、鳥山石燕門に入り北川豊章と名のる。現在判明しているところの初作・富本正本「四十八手恋諸訳」を出版。勝川春章風の細判役者絵数種を発表。

1781年　（天明元年）　28才、喜多川哥麿と改め、美人画家に転向。

1784年　（天明4年）　31才、その頃出版元蔦屋重三郎に見出され、新人として売り出されたが、鳥居清長や北尾重政などの影響を強くうけ、彼独自の様式は未だうちたてられなかつた。この間、動植物の写生に没頭、対象を写実的に表現することを習得し、「画本虫撰」・「潮干のつと」など多くの絵本を発表。

1790年　（寛政2年）　37才、絵本の仕事を一切止め従来の美人画の特色であつた群像形式をすて雲母摺大首絵を発表。遊女・芸者・水茶屋娘等を通して彼の理想的女性美を表現しようとした。

1793年　（寛政5年）　40才、彼の人気の絶頂。多くの出版元の依頼により濫作をはじめる。所謂哥麿型という形式主義に堕して、芸術的爛熟から衰退への兆候をみせ始める。

1798年　（寛政10年）　45才、この頃に山姥金太郎図が多い。

1801年　（享和元年）　48才、作品に末期的傾向が著しくなる。

1804年　（文化元年）　51才、「太閤五妻洛東遊観之

図」が幕府を誹謗したといわれて入牢、50日の手鎖の刑をうける。自信家で強気の性格であつた彼はこれによつて大打撃をうけたものと思われる。

1806年　（文化3年）　53才、9月20日失意のうちに歿した。東京都世田谷区専光寺に葬り、法名・秋円了教信士。

② 作品傾向略解

初期の作品「青楼尓和嘉鹿島踊」には清長風の健康な肉体表現が感じられる。

寛政中期、彼の最盛時には「婦人相学十体」・「歌撰恋之部」・「当時全盛美人揃」など幾多の傑作がうまれている。女体のやわらかさ、ふくよかさを表現するために「娘日時計」・「錦織哥麿形新模様」などに無線摺がみられることは、彼の創意・工夫だろうと云われている。

寛政末期になると「山姥金太郎図」などの母子図や「教訓親の目鑑」などのような作品があらわれ、顔面も面長になり、老人の理屈つぽさのようなものが感じられるようになる。(2)

Ⅲ 考　察

(1) 単独像にした場合の坐像

坐像＝「婦人泊り客之図」3枚続きのうち、中央の図の婦女坐像。以下本稿では単に坐像という。

Fig・1〔原図は色摺（錦絵）であるが、本稿では作図上・製版上などから白描とする。〕より前部の婦女立像を取り去り、坐像を作図しFig•2とする。Fig•1の坐像とFig•2を比較してみると、Fig•1は「……内部の寝巻姿の3人はいづれも坐像に描かれ、哥麿が得意のよく見かけるposeである。（中略）中央の腰部が実にしつかり描かれている女は何事かささやきかけていそうなposeである。」(3)と云われているように見事なvolumeを感じるが、前の立像を取り去つたFig•2は、volumeの見事さというより、むしろだらりと伸びた腰部にoverなdeformationを感じるのではないだろうか。試みに腰部だけをいくらか小さくしてみたFig•3の方が単独の坐像とした場合、しまりがあり美的効果が大きいと思われる。もしFig・3の方がFig•2に比べて美的効果が大きいとしても、2つのformeを組み合せたFig•1（原図より白描）の場合はFig・3の腰部では小さすぎ、Fig・2（原図より抽出・白描）の腰部で美的効果があるものと思考される。その傍証として次に哥麿筆・版画「髪結い」をあげて考察を進めてみる。

(2) 哥麿筆・版画「髪結い」について

「この図は歌麿の傑作の1つである。もしも後の鏡をもつ女がいなければ、最傑作となつたであろう。髪を梳く女の肩から腰、腰から腿にかけての量感は凄まじい。」(4)この解説にもあるように本図（Fig•4）の女性の腰部は実にがつしりしたvolumeのある表現である。しかもposeは哥麿得意のしどけないposeで、Fig・1の坐像に似ている。ここでFig・4の坐像の前にFig•1にならつて女性立像を仮想して作図しそれをFig•5とする。

次に仮想立像の作図根據を列記する。

ⓐ Fig•1の坐像の前額髪際・頤端間を1とすると、

ⓑ Fig•1の立像の想定膝頭部位（坐像の左たもとの下面のほぼ延長線上）の着物の巾は1.25となる。

(c) 坐像・前額髪際→頤端：立像・想定膝頭部位着衣巾＝1:1.25

前記の1:1.25の比例により作図したのがFig•5である。

Fig・5をみるとFig・4に表現された坐つた女性のvolumeは殆ど感じられない平凡な図になつてしまう。Fig•5の腰部だけを少し大きくしたFig•6の方がFig・5に比べて女性坐像はよりvolumeを感じるし、美的効果も増加したのではないだろうか。このFig・6から坐像だけを抽出したFig•7をFig•4と比較してみると、単独像の場合Fig•7の女性腰部はいささか間のびした感じをうけるのである。哥麿は同じようなformeの坐像でも、単独像の場合と、重なつた背後の方に描かれた場合とでは、その腰部のformeのdéformationを意識的に構成したか、或は経験と美意識から出た勘によつて見事に表現し得たのであろう。

(3) 組み合された2つのformeとdéformation

(1)(2)から考察を進めると「婦人泊り客之図・中央の図」において、哥麿は2つのformeが組み合された場合の美的効果を、déformationされている坐像の腰部をより大きく描くことによつて、更に高めていると思われる。習作と制作の場合におけるReal proportionとApparent proportionの問題は、西田正秋教授がくわしく説いておられるので、ここでは説明はさけるが、それと似た意味において、本稿ではdéformationと美的効果を2つの組み合されたformeの場合にとり、述べてみたのである。本問題はより多くの作例により更に展開されると思われるが、それは後日の研究課題にしたい。

なお、本拙論は昭和37年度1年間当短大から派遣研究員として東京芸大・美術学部・基礎理論研究室に留学し、同室主任教授・西田正秋先生の直接指導を得つつ、人体美学関係の研究に専念した際に提出した副論文の1つで、第6回提出の小論なのである。ここにこの1年間御懇切な御指導を給わつた恩師西田正秋先生に深く感謝の

意を捧げる次第である。

---

(1) 西田　正秋　美術解剖学論攷

(2) 平　凡　社　世界大百科事典　7

近藤市太郎　歌　麿

藤懸　静也　浮世絵

(3) 渋井　　清　日本版画美術全集　第4巻

浮世絵Ⅲ

(4) 吉田　暎二　浮世絵の美

Fig. 1　（哥麿より作図・小野原図）

Fig. 2　　(哥麿より作図・小野原図)

Fig. 3　　(哥麿より作図・小野原図)

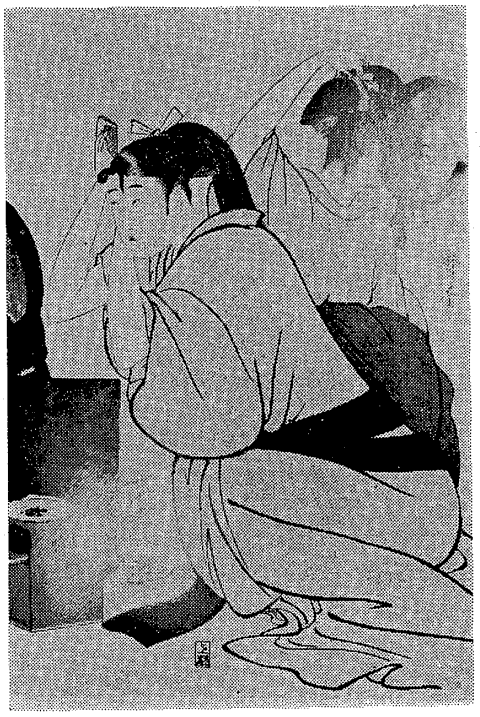
Fig. 4　（哥麿より作図・小野原図）

Fig. 5　（哥麿より作図・小野原図）

Fig. 6　（哥麿より作図・小野原図）

Fig. 7　（哥麿より作図・小野原図）

哥麿筆・版画「婦人泊り客之図」（３枚続き）



哥麿筆・版画「髪結い」